実行団体 事後評価報告書	特定非営利活動法人 馬瀬川プロデュース	活動地域	岐阜県下呂市 馬瀬地域

自然とふれあう活動による地域づくり事業

E-mail　mazegawa.produce@gmail.com
URL　https://www.mazegawaproduce.com/

資金分配団体名	一般財団法人 中部圏地域創造ファンド	事業の種類	草の根支援事業 2019
資金分配団体事業名	NPO による協働・連携構築事業	実施期間	2020 年 4 月～2023 年 3 月

1 事業概要

社会課題	下呂市馬瀬地域は、過疎化の進行によって、集落機能が低下し持続困難な集落となっている。少人数になっても自然の中で暮らし続けることのできる集落ネットワークを活性化し、住民の暮らしを支える生活の確保（日常生活支援機能の確保）、住民の暮らしの糧である地域産業（農・林業、観光等）の振興が必要である。人口減少が進んでも、自然環境を維持し、将来は、馬瀬のような自然環境で暮らしたいと思う若者が増える必要がある。
事業概要 対象者	馬瀬川の清流をはじめ豊かな森林空間を利用し、森林アスレチック、沢登り、釣り教室等、観光客等を地域に呼び込み地域振興に寄与してきたが、ここにきて人口が 1,000 人を切るのが目前となり、住民自身の身の回りのことさえ支障をきたすほど深刻な状況となり、活動の軸足を地域支援活動に置いて、地域のために河川環境を守り、道路維持、灌漑用水の維持、交通安全、緊急時の対応等の支援を行っている。 本事業の実施によって、協議体メンバーとの協働によって、都市部から学生や若者を支援部隊として地域内に招き、その若者たちは豊かな自然環境の中で、地域の歴史や文化に触れるなど、学内や都市部では体験できない農業・林業体験、また、地域の木材を利用した建築物等の製作を行いつつ、地域支援活動を行うこととした。 対象とするのは、下呂市馬瀬地域の住民とそれを支援する都市部の大学の学生や若者である。
中長期 目標	馬瀬地区及び加子母地域での地域活性化の取組みが進み、都市部等から多くの若者たちが訪れて地域支援活動等を行い、自然豊かな地域の魅力が再認識され、地元に住み続けることの意義と自信を持つ人材が増加する。自然環境への関心が高まり、馬瀬に住みたいという人が増えている。
活動方針	活動開始に当たり、対象エリアである馬瀬地域の住民を対象にアンケート調査を行い、地域住民が期待する事案を把握し、出して次の 3 項目を中心に取組み、①生活圏内区域の草刈り、②空家対策、③イベント支援等のほか、都市と農村、高齢者と若者の交流を行って地域内の活性化の一助となることを主眼とした。

3 年 間 の 活 動 の 成 果	
事業の参加者の中で地域の自然に触れ、馬瀬に住みたいと感じる人が現れるようになった。	**・参加学生ほぼ全員（45 人） ・観光客 10 数名**
事業により若者が地域を訪れ、交流が始まったことにより、住民が郷土に住み続ける意欲が高まった。	**49 戸**
地域住民が、自分たちの郷土が自然豊かな地域であることを再認識し、自然環境整備活動が開始されるようになった。	**29 人**
参加者が減少し、衰退していた地域イベントに若者たちが参加し、スタッフとして支援したことで盛り上がりを見せた。	**来場者 700 余人**
空家調査を実施し、実態把握と活用方法を検討し、定住促進に資する。	**空家の実態をデータ化**

2 事後計画の記載内容

2－1 主な活動とアウトプット　※アウトプットの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

活動 1

・全住民宛の「住み方アンケート」を実施し、要望、ニーズ等を把握し、これに基づいた支援活動を行う。(1-1)
・草刈り支援を実施する。(住み方アンケート調査結果による。)(1-2)
・草刈りマップを作成し、耕作放棄地、活用可能地を把握。(併せて空き家調査結果に活用。)(1-3)
・草刈り講習会を行って、誰でも刈払機が使用できるようにする。(地元住民と交流の機会として計画・実行する。)(1-4)

アウトプット	地元が主催するイベントの支援及び住人を対象に行った「住み方アンケート」のニーズ、要望を種とした活動を行って、住みやすい地域づくり活動を行う。		
指標　1-1	①入込者の数　②アンケート調査結果		
	初期値	目標値	実績
	①1,900 人 ②3,000 人（コロナ前）	①2,200 人 ②自然のすばらしさに対する理解が進んだことが確認できる	初年度 1,900 人 2 年度 2,600 人 3 年度 3,200 人（見込み）

アウトプット	自然豊かな地域であることを実感するためにも、地元住民に自然環境整備活動に参加を促す。		
指標　1-2	①地元住民参加者数　②アンケート調査結果		
	初期値	目標値	実績
	①73 人 ②住民アンケート調査で把握する	自然豊かな地域であることを実感するようになった住民の数 100 名 当初に比べ 20%増	150 人 （内訳：丸山公園づくり 106 人、里山づくり 19 人、林道整備　25 人）

アウトプット	地元のこどもたちや活動するメンバーが、地域に愛着を感じるようになるため、寺子屋での学習支援、自然環境の勉強会を実施する。		
指標　1-3	①全体の参加者及び地元のこどもの参加数 ②地元支援者の人数　③アンケート調査結果		
	初期値	目標値	実績
	①0 人 ②0 人 ③アンケート調査	①　寺子屋：地元 30 人、他地域 20 人 ②　20 人 ③愛着を持つようになった人　20 人	コロナまん延により不実行

アウトプット	地域環境の維持、及び、地域住民との交流促進に向けて、要望の強い草刈り、河川・用水路等の地域支援ボランティア活動を実施する

活動 2

・空き家調査を実施し、リスト化する。(住み方アンケート調査結果による。)一部、利用可能空き家を改修し、学生の交流の場として活用する。(2-1)
・空き家の内、利用可能なものを改修し、学生の建築実習をするほか、交流の場として活用する。また、空き家の活用で定住促進を図る。(2-2)

アウトプット	地域環境の維持、及び、地域住民との交流促進に向けて、要望の強い草刈り、河川・用水路等の地域支援ボランティア活動を実施する。		
指標　2-1	①ボランティアの数・回数 ②地域との交流回数及び地域住民の活動への参加人数		
	初期値)	目標値	実績
	②　無し ③　無し	①草刈り支援参加者 20 人、1 回、河川・水路清 20 名、2 回 ②2 回、50 人	草刈り 73 人、17 回、145.5 アール、水路・道路清掃 1回 21 人、農業支援 20 回 40 人、イベント支援 12 回、31 人、建築支援 2 回、78 人

アウトプット	空き家の実態把握・整備等、地域に住める環境づくりを推進する。		
指標　2-2	①空き家の実態把握・整備件数・活用件数 ②移住した人の数 ③空き家を改修して活用		
	初期値	目標値	実績
	①②③把握できていない	①把握空家 5 戸、整備件数 1 件 活用件数 1 件 ②　目標数値 5 人　→2 人 ③整備件数 1 件　活用件数 1 件	①空家 49 戸、廃屋 14 戸、活用家屋 11 戸 ②7 人 ③3 件

活動 3

・若者の入込の他、自然体験、観光目的の入込者を把握し、自然・環境に関する関心について把握する。

アウトプット	入込者の自然体験を経た自然・環境に関する関心の高まりについて把握するために、調査を行う。		
指標　3	①聞き取りおよびアンケート調査 ②調査で自然・環境への関心が高まったと回答した人の数		
	初期値	目標値	実績
	①　把握できていない ②　把握できていない	①50 人 ②10 人	①46 人 ②46 人

2－2　3 年間のインプット

	計画値		実績値	
資金	事業費　（自己資金含む）		事業費　（自己資金含む）	
	直接事業費 管理的経費	6,337,500 円 162,500　円	直接事業費 管理的経費	
	評価関連経費	225,000 円	評価関連経費	
人材	内部：8 人（担当者） 外部：3 人（建築士等専門家）		内部：7 人（担当者） 外部：3 人（建築士等専門家）、 アドバイザー2 人	
資機材・その他			木材（小角材、板材ほか） 刈払い機 10 台、チエンソー2 台	

1）資金インプットの特徴、インプットに対する成果の規模や質等の妥当性・効率性

人件費について、当該組織は事業開始の前年まで収益事業を伴った活動を行っていたため一定の予算建

てが可能であったが、もっぱら地域問題に取組み非営利活動のみに活動内容を特化したため、人件費予算の捻出に苦慮した。当該事業において人件費を一定額の支出が可能となったため活動が容易となった。

2）自己資金の種類、資金調達で工夫した点

1）に記したとおり、計画段階では自己負担の拠出の目安を立てることが用意であると判断していたが、収益事業を別団体に分離したため見込めず、急遽、当該組織への寄付金を当該事業の自己資金に充てることとした。

3）人材インプットの役割分担等

当該組織は、周囲を山に囲まれた人口 1,000 人余の寒村で、深刻な高齢社会となっている。こうした中にあって、活動に参画する人材の確保は極めて難題となっている。現在、組織人員は総員 16 人で極小であり、規程等によって定めた職務の執行を除いては、明確な役割分担などには及ばない状況にある。活動を行う場合は、そのたびごとに全会員通知して、都合のつく者が活動に参加・出役して実施している。

3 事後評価の方針

3-1 評価の体制

外/内	氏名	所属・役職	評価の分野
内部	中川護	特定非営利活動法人馬瀬川プロデュース　代表理事	全て

3-2 事後評価のポイント

1	事業参加者の中で、馬瀬に住みたいという人が増加したか。
2	来訪者と地域住民の交流や自然環境体験の中から、起業する機会・人材が増えたか
3	地域住民との様々な交流を通じて、地域に誇りや愛着を持つ地域外の人々や地域住民、地域内従業者が増えているか
4	「住み方アンケート」で得たニーズや要望をもとに行った支援活動や交流によって住み続ける意欲が高まったか

4　事業の主要な成果と、それを実現した要因分析

4-1　事業参加者の中で、馬瀬に住みたいという人が増加したか。

成果 1	事業に直接・間接参加者の中で、馬瀬に住みたいという人が増加したか。		
アウトカム指標　1	馬瀬に住みたいと思う若者、または子供の数		
	初期値	目標値	実績
	把握できていない	'新規に 20 人（5 家族）程度	・学生 123 人 ・移住者 2 家族 7 人（内子供 4 人） ・移住地を模索中 3 組 6 人 ・観光客 7 人
評価方法	・移住者は実績。観光客は直接インタビューしたもの。学生は、活動に参加した者に対し、活動の反省会において意見聴取を行うほか、馬瀬の印象を問い、本人から生の声を集計した。		

1）確認できた事実・成果

●草刈りボランティアの実施（2020 年 8 月～9 月）

事業開始に当たり、地域全戸（408 戸）の住民を対象にした「住み方アンケート」調査（資料 1 ）を行った。その結果（回収率 45%）、①草刈り作業の支援（54%）。②空家の調査と活用の検討（43%）。③河川の清掃（３２%）等の要望が多かった。急激な人口減少と高齢化が進行し、身の回りの環境維持さえやり辛くなった当該地域の住民は、この地域に住み続けられるかどうかを懸念していることが、将来の馬瀬に不安を感じる（59%）、馬瀬に住み続けたい（52%）との回答から明らかになっている。

活動の基本を、地域住民の要望に添って、その手段は、都市部の学生や若者を地域に招聘し、豊かな自然を楽しみながら地域住民との交流し、要望の多い①②③等をボランティアで支援してきた。

① 草刈り支援について、当会の会員及び学生らによって実施し、31 回、述べ 73 人工、145.5 アールを実施した。実施に当たっては、安全作業の確保のために、必要な安全講習のほか草刈り研修を実施し、地域住民による機械の取り扱い要領の実習を複数回実施した。また、岐阜県が所有するラジコン草刈り機を当該組織が借用し、草刈り作業の厳しさを自走する機械によって労働強度の軽減、安全作業の推進等を目的に、学生らの他に地域住民に呼びかけ（資料５）ラジコン草刈り機による実演会を開催し好評を得た。

② 空家調査については（資料２）、全区域内の空家調査を実施するとともに、行政が過去に実施した調査結果も参考にした。その結果、空家 49 戸、廃屋 14 戸、期間中に活用された家 10 戸となった。また、空家の内、ゲストハウス、シェアーハウス等の活用、学生等の活動拠点とする改修戸数は 1 戸である。この調査結果は、今後、継続的な活用が可能となるよう行政との共有化を図り維持することとする。

③ 河川の清掃等、地域内の環境整備については、これまで当該組織が長年にわたり馬瀬川クリーン作戦として流域内の清掃活動等を実施してきたが、地域住民を巻き込んだ活動になっていないことから、事業開始年度から連携を図ってゴミの回収、巡回見回り等を実施した。

④ 地域が主催するイベント等（資料３）の実施に当たり、必要な要員が高齢化と人口減少で不足し、当該組織から若者の支援が要望され、学生らがこれに参加し、実行スタッフとして協力、支援した。

⑤ 建築に関連する支援活動は、参加した学生の大多数を占める木匠塾メンバーが、本来、建築を学ぶ中で現地において実習等に取り組むことを目的にしており、地域からのリクエストによる物件を実

習教材として施工することとし、いくつかの要望物件の中から、キャンプ場の事務所の増築及び倉庫増設を手がけた。

実施に当たって、コロナによる制約で一度に多くの学生が拘わることはできず、一部の学生によって施工した状況をビデオに収録して他の参加できなかった学生に伝達する方法を講じた。この間に、学生らの役員会議が開催され、その日程内に建築中の現場を支援するほか、道具の使い方教室及び手入れの指導を受ける実習を行った。指導に当たったのは、地元の建築企業から招聘した若手大工等技能者で、実技指導に加え学生と年齢差が少ないことから、進路の選択に拘わる内容に及ぶテーマで交流が行われ、有意義な活動となった。

⑥ 2022 年夏及び秋期に実施した聞き取り調査（資料４）によれば、住民自身が自分の郷里に誇りを持ち愛着を感じるようになったことを明確に表現する住民が目立つようになったことを、聞き取り調査のほか、住民との交流において感じた学生たちが感想を述べている。

また、この活動に参加した都市部からの学生の大多数が、自身が再び馬瀬を訪れたいと感じていること、将来馬瀬に住みたいと感想を述べていることからも、この地域への好感度が高まったことが伺える。

●本事業期間内における地元住民の変化及び活動への参加

1　本期間内に実施した活動項目及びその内容は、事業開始当初に行った住民対象のアンケート結果から最も要望が多かった項目を活動項目に選定し、これを実施するとともに、学生らは地域の自然や文化に触れながら、学内では体験できない実習を行ってきた。

2　実施項目は上記の通り数項目にわたったが、何れの活動においても残念ながら地域住民の積極的な参加までには至らなかった。

3　しかし、住民の我が組織や活動にはこれまでに無かった理解が進み、数少ない地元企業のほか各種団体から今後は支援したい旨の意見が届けられるようになった。また、学生に対しては、物珍しさもあって、興味を示されることが多くなり、中には差し入れのほか自宅への招待など歓迎されることが多くなった。

4　この事業着手前までは、当該組織の認知度は低く（38%資料１）、NPO 活動そのものが理解されず受入れられない状況にあったが、活動の状況が地元の話題となることが増えを、ラジコン草刈り機のデモの参加者（県、市関係者及び地元住民 7 名、学生 15 名、会員 7 名）、地元主催のイベントへの参加者（700 人余）で空前の賑わいとなったほか、キャンプ場増設及び倉庫づくりには見学者（8 名）が現れた。

これは、事業実施前には予測できなかった住民の意識の変化の表われと考えられる。

5　地域内の環境整備について、住民による里山整備が実施されるようになった。これは、近年、地域の中心である中切地区では、周辺のスギ造林地が繁茂して、日中においても集落の中まで猿や猪、狐などの野生鳥獣が出現することが多くなっており、10 数年前に防護柵を設置したが効果が少なくなってきたことで開始された。

居住地周辺の森林を伐採した跡地の取扱いについて、里山林の造成について当団体に対して集落役員らから相談があり、「里山再生に関する提言書」（資料６）を作成するとともにその手法等の説明会を役員らに対して行った。その後、集落住民 30 数名が参加して、地拵え（林地の整理作業）が実施されたほか、ミズナラ、コナラ、クリ、トチノキ、サクラ等の潜在自然植生の植込みに備えて苗木の養成が手がけられ、この指導に当会が当たった。

これに見られるように、地元住民の総意によって地域の環境整備が実施されるようになったのは、直接的な影響とは断言できないものの、住民が自ら郷土を守ろうとする意欲が醸成される環境になったことは事実であり、本事業の影響が全くないとは考えられない。

２）成果（課題）が生まれた要因

●地域住民を対象としたアンケート調査を踏まえて活動を展開し、住民の参加を促した

① 2021 年 8 月に地域住民の全戸を対象にした「住み方アンケート調査」の結果を踏まえ、住民の要望事項を活動項目の基本としたことで、急速に活動の目的が理解され活動がスムースに進んだ。アンケートに示された要望事項は、高齢化により若者がほとんど見られない（存在しない）地域となり、身の回りの環境整備や維持すらままならない状況が見られ、ここに忽然と都市部から学生や若者が大挙してボランティアで訪れ、都市と農村、高齢者と若者の交流が現実となったことは、当該地域としてはまさに、「塞翁が馬」と軽率に眼前の現象を理解できない農村特有の頑固者を除き、ほとんどの住民は晴天の霹靂との評価があった。

② 草刈りに関しては、「知らない間にあの箇所がきれいになった。」と驚嘆した老人が、地域の住民が集散する喫茶店で話し、朝の話題となったほか、水路の土砂除去作業は、「若い者には叶わない。」と参加した住民が表したと伝えられた。

③ 高齢者が集うマンネリ化した地域主催のイベントに、当事業から支援者として参加した学生（地域では若い女学生たちと言われている。）が、販売や給茶サービスの支援を行い、会場は開闢以来の 700 人を超える集客となった。（イベントの来賓として居合わせた市長は、学生たちの支援活動に驚き、説明を求めた。）

④ 農業支援では、新規就農者のトマト農家を支援し、慣れないトマト生産であったところを勇気づける結果となり、来年も継続の要望が出されている。

⑤ 木匠塾から参加した学生は、本来、建築を目指した活動を行ってきており、地域のキャンプ場内の施設の設計・施工で改修、及び、倉庫の増設などを手がけ、何れも施主から感謝された。

以上、これらの活動内容の全てが、地域からのリクエストに応えることとなったことが、地域との交流を深め、逆に地域住民を奮い立たせることとなって、活性化に繋がったと考えられる。

●協議体メンバーの経験や実績を活かして協働した成果

①この活動が順調に進んだ要因のもう一つは、参加した協議体の力が活かされ結集した結果である。事業対象地（岐阜県下呂市馬瀬地区）は、人口減少と高齢化が進んで極度に疲弊し地域である。当該地域は、これまで地元自治体はもとより、住民の各種団体が長年にわたり取組んで来たにも拘わらず、全く変化が見られず、旧態依然としてただなすがままの状況にある。

① 活動の実行部隊となったのは、協議体メンバーである都市部の大学に所属する学生からなる加子母木匠塾の若者たちのほか、aichikara が募集した学生（至学館大学等）で、彼らは事業地の馬瀬に遠征した。

② 木匠塾活動は、これまで加子母地域で活動を開始して 30 年の経験を有している。この学生たちに加え、aichikara は、名古屋に所在する至学館大学を母体として、東日本大震災で被災した子どもたちを中津川市加子母に招いて夏休みを過ごさせるなど、豊富な活動を行ってきた。こうした構成組織によって取組んだことが、この事業を一層円滑化し目標に沿った成果を生んだと考えている。

③ 事業開始に当たり、2021 年 6 月には、協議会メンバーが揃って下呂市馬瀬地域の区長会に出席し、計画内容を披瀝して賛同と支援を要請した。その後 2021 年 8 月～9 月に地域全戸を対象とした住み方アンケート調査を実施して、地域の状況把握を行った。アンケートに結果は、その概要を広報誌にして、関係団体に配布したほか地域内の全戸に配布した。（2021 年 11 月）

④ 実行部隊となった学生が所属する各大学では、コロナのまん延によって学外での行動のガイドライ

ンを設け、集団行動が制約された。各大学の代表と私達は、活動の実施について変更を余儀なくされ、これまで行ってきた多数の学生我集団で活動することを制限し、できるだけ各大学の学内で一定の準備活動を行った後、少人数我五月雨式に分散して事業地に赴く方法をとり、各大学のガイドラインが解かれるようになった時期から徐々に集団で現地集合を開始した。

⑤ 活動の開始に当たっては、コロナの基本的な感染防止対策を講じ、道中の感染防止に最大の配慮をし、2021 年度は、コロナによって活動スタイル及び内容の変更や、休止もあって大きな障害となった。

⑥ 2022 年度当初は、コロナの影響で現地での活動を経験できなかった学生が多くを占めるようになり、改めて最初からそのノウハウや対処方法を伝達しなければならないことで、多くのロスを生じた。

⑦ こうした状況にあっても、必要なコミュニケーションや会議は欠くことなく、夜間にネットによる会議開催などで繰り返し行い、意思疎通を図ってきた。

●地域の技能者との連携

① 活動の実行部隊は、自らも学ぼうとする学生や若者である。自然豊かな馬瀬地域において、都会では体験できない自然とのふれあいや、農山村の生活を体験できる機会を設けたいと、計画の中に盛り込んだ。例えば、真夏に草刈りや、農業体験では体中が汗だくとなり、短時間でも馬瀬川の清流に泳いだり、魚を捕獲して自然を体験した。

② 草刈りボランティア作業においては、地域の熟練者から機械操作や安全作業方法の指導を受けた。

③ 建築実習は、地元からのリクエストで構造物をつくり、学生らによる自らの実技体験として、地元企業から若い宮大工や技術者による現場での指導を受け、さらに鑿や鉋など道具の手入れや使い方の講習会も実施し、学生たちと年齢差が少ない希少な若い技術者との交流は一層盛り上がった。

④ 植物観察体験は、事業地である馬瀬地域は森林が９８％を占めており、かつては、中間温帯林の植生であるミズナラ・コナラの森林で覆われており、薪炭の生産が盛んであったが、戦後のエネルギー革命によって薪炭はガスに変わり、スギやヒノキの人工林となった。馬瀬川の上流部に残る僅かな天然林は、潜在的な自然植生の様相をとどめており、学生を対象に　植物観察を行った。

３）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

● 都市部から活動に参加した学生のほとんどが、農山村で宿泊体験や、ボランティア体験は初めての経験で、とても楽しく有意義であったと感想を述べている。

● 活動に参加した学生のほとんどが、将来は馬瀬のような自然豊かなところで生活したいと言う意見が多かった。

● 地域住民の活動に対する評価が高くなった。

４）気づきと今後に向けて

本事業の実施によって、地域住民の本団体の活動に対する理解の高まりを大切にして、さらに会への信頼を得られる努力を続けながら、本会への入会を促進し、組織の拡充と健全化を図ることとしたい。

4-2 来訪者と地域住民の交流や自然環境体験の中から、起業する機会・人材が増えたか。

成果 2	耕作放棄地に新しい農業取組み		
アウトカム指標 2	新たな仕事（産業）創出の数		
	初期値	目標値	実績
	①'建設業 1 社、建築業 3 社、ホテル 1 社 ②農家　220 戸、花卉栽培　1 戸 ③　林家　0 戸 ④サービス業　商店　1 軒、食品製造（ケイチャン）1 軒,喫茶店　2 軒	①　新しい建築グループ　1 団体 ②　耕作放棄地に新しい農業の取組み　1 グループ ③林業・木材を活用した新しい事業 1 グループ ④　商店（日用品販売）2 軒	①　なし ②　②グループ a　二村富喜夫 b　川口太三 ③　なし ④　農産物の販売店 1 軒新設
評価方法	現地調査の結果		

1）確認できた事実

●会員の拡大、住民の活動参加に至らず

今回の活動通じて、人口減少、高齢化の進行によるリスク等を明らかにして、少人数になっても地域住民による「人口が減少しても住み続けられる力強いコミュニティづくり」を狙いとしてきた。

残念であるが、住民が自ら腰を上げて会員への参加・加入はなく、多くの活動参加を得ることはできなかった。

しかし、それまで私達の活動に対して無関心であった住民の多くは、都市部から多くの学生を招致して、ボランティア活動が実施された状況を目の当たりにするようになり、「そんなことができるのか」と言う評価に変わるとともに、ＮＰＯ活動に関心が高まり、活動の様子を見学に来る住民が増えたことは、これまでに見られなかったことであり、関心や理解が深まったと評価でできる。

一方、自治体である下呂市馬瀬振興事務所の対応は、事業開始時点から当該事業についての関心が高く、地域への理解と浸透が進むように、私達の要望を受入れ、区長会議（町内会長会議）に時間を割いて活動計画や実施状況を報告する機会を提供した。また、地域の観光協会、町内会等の団体も、私達の組織の出席案内があるなど、その対応が好ましい方向に変わった。

更に、地域内の企業から会活動に協力・支援したい旨の意向が寄せられるようになったことは大きな成果である。

本事業の実施期間中に、高齢化によって耕作を休止する農家から水田を借り受け、耕地を集積して稲作を行う農業団体が新たに２団体誕生した。また、地域で生産された農作物の販売施設「ふれあいファーム」が中切区（中心地）に開店した。この団体等に、直接関わりを持ったことはないが、本事業の活動において休耕地の調査を行い、地域内の耕作者など地元農家との接触を行う段階で意見を交換した際、増加する休耕地を話題にしており、農地の維持についての認識が高まったことも事実である。また、協議体メンバー（NPO かしもむら）が、本事業期間に開始したオンラインショップ「カシモール」を馬瀬地域においても実施しようと呼びかけたことも、地域の農産物を自分たちで販売しようとする意欲が高まったと考えられる。

2）成果（課題）が生まれた要因

●　会員の増加はないが地域住民との距離が縮まった

なぜ、これまでに念願であった私達の組織と地域住民との交流や距離が縮まらなかったか、また、何故、急にその距離が縮まったかについて、最も有力と考えられることは、事業開始当初に住民を対象としたアンケート調査の実施が功を奏したと考えられる。

また、スタート時点から粘り強く馬瀬振興事務所（自治体事務局）に働きかけを行い、理解を得た

ことである。その結果、全戸を対象としたアンケート調査書の配布は、これまで情報誌の配布も否定的で、断られ続けていたが、各区長によって配布されたうえ、さらに回収もていねいに実施された。

地域の全戸数は 406 戸で多くはないが、各区とも住居が分散しており、また、訪問しても留守宅が多いなど配布は困難を極めていた。今回、配布から回収までの一切を各区長によって実施されたことは、画期的である。

このように、所期の目的とした地域住民との意思疎通を図ることや各事業をスムースに実施できたことは、スタート時点で行政である振興事務所と意思疎通を図り、その後、常に事業実施のたびに地元住民との意思疎通を図ってきたが成果に繋がったと考えられる。事業実施の評価はもとより、地域住民の理解を勝ち取ることができた大きな成果であり評価に値する。

3）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

①聞き取り調査の実施で、学生が各戸を訪問した際のことである。割り当てられたノルマを消化しようと不慣れな態度で恐る恐る訪ねたところ、日頃訪問者が少ない老夫婦の家庭では、思いもよらない若き娘さん（女子大生チーム）が訪ねてきたことを喜んで歓迎し、お茶にお菓子と接待攻めに遭い、延々長時間に及んで食事時となり、結局食事までごちそうになった（中切地区で、朴葉寿司の郷土料理）。その調査グループに似た話がいくつかあって、結局、ノルマは達成できずしまいとなり、調査は長期に及ぶ結果となった。

②建築実習で、設計において柱（6 本）の長さが計画より数センチ短く、急遽、柱加工のやり直しとなった。柱材は施主が自分の山から生産した木材でできたもので、取り替えは用意であったが、加工に時間を要し、実習時間の延長となり結果的には貴重な体験となった。

③ 木工家具の加工で、パソコンによる設計寸法を信用して加工したが、木材の重量等まで考慮されておらず、完成しても移動が困難であることが判明し、再度、設計からやり直しをすることになり完成までのタイムリミットが厳しくなった。しかし、学生とお施主さんの一層のコミュニケーションが図られたこと、作業の進め方について学習が深まった。

4）気づきと今後に向けて

地域住民は、高齢化が進む当該地域に都市部からの学生や若者を迎い入れて体験活動や支援を受ける活動を継続するよう強く望んでおり、団体の重要な活動として継続できるよう最大限の努力をしたいと考えている。

4-3 地域住民との様々な交流を通じて、地域に誇りや愛着を持つ地域外の人々や地域住民、地域内従業者が増えているか。

成果３	地域に変化が表われたか		
アウトカム指標　３	地区に誇りや愛着を抱く人の数		
	初期値	目標値	実績
	把握していない	地区に誇りや愛着を抱く人の数が増えていることが確認できる	地域が景観整備を始めた。 公園づくり 106 人、里山づくり 19 人、（来年度以降継続） 道路整備 25 人（毎年度増）
評価方法	実績値を計上した。		

1） 確認できた事実

本事業の実施に当たり、中切地区の区総会において、かねてから加子母地区で活動していた例を挙げて馬瀬地区での展開を望む意見が出されていた経緯もあり、本年度から開始したいことを披露した。このことが直接の影響とは限定できないが、地区内の森林所有者で組織する造成組合が里山整備を発案し、その企画及び指導の協力要請があった。（別紙提案書）

その後、2022 年秋までに、造成組合の役員による会議が開催され、これに出席してアドバイスをした後、里山づくりの作業が開始された。

これとは別に、地区内の集落の傍らに昔、公園が存在していたという噂がある場所に、地区住民の手で整備が開始され、次第に参加する住民が増えて本格的な作業が実施されて、円山公園が完成した。

林道の整備はこれまでも行われてきていたが、本事業開始となったのはコロナ禍であったが集落からの出役が次第に増加し、現在では元気な者であれば強力な参加要請をしないで多くの市民が参加するようになった。

2） 成果（課題）が生まれた要因

本事業の開始及び展開が馬瀬地域内で展開されたことが直接的な要因とは言いがたいが、上記のような活動が多くとは言いがたいにしろ開始されてきたことは、成果と言って良い。

3）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

会員からは、なぜ、今、こうした活動や住民の動きが始まったか不思議であると首をかしげる者さえある。逆に、これまでは地域の人口減少や高齢化が進むことへの危機感が薄く、自分たちのこととして捉えることがなかったのではないか。コロナ以降、社会構造が変化していることが住民の意識を少しずつ変化させていると考えられる。

4-4 「住み方アンケート」で得たニーズや要望をもとに行った支援活動や交流によって住み続ける意欲が高まったか。

成果 4	アンケート調査以降の地域の状況		
アウトカム指標 4	草刈りマップ作成、空き家調査の実施		
	初期値	目標値	実績
	なし	① 草刈り困難、 ② 空き家活用	① 草刈り支援の実施は、地域の要望を満足させた。草刈りマップの作成は、期間内完成は困難、再検討 ② 空き家の活用は、限定的となった
評価方法	現地調査		

1）確認できた事実

1） 草刈り支援は、延べ 31 日、73 人工、145.5 アールの草刈り面積実績となった。実施した学生らは全員初体験で不安を抱えたままのスタートであったが、安全作業、操作方法の講習を受け、その内要領を得て次第に効率的な作業が行われるようになった。

地域内で学生らが草を刈る状況を見かけた地域住民は、地域内の話題となり評価が高まり、草刈りが行われた箇所の地主は、大層喜んでいるとともに、来年度以降の事業の継続を心配し、実施団体へ

の支援の声が出るようになった。（前項で記した通り）

1－2）草刈りマップの製作は、現地調査を実施して、耕作地、耕作放棄地、転用地、その他等に区分した図面作成等の一定の資料を得ている。最近になって、農水省等による農地のデータ処理システム等が開発されており、これに、これまでの調査データを組み込んだ活用に向けて行く考えとなった。

2）空家調査は、地域内全戸の現在の使用実態を調査し、空家 49 戸、廃屋 14 戸、活用中 11 戸を把握し、過去に自治体が行った調査も踏まえたデータを作成した。（2021 年）

空家の内、転売若しくは借家としての活用の可能性のある物件は少なく、流動的である。今後、活用促進の資料としての活用に充てることとしたい。

また、ボランティア活動等で当地を訪れる学生らの拠点とする計画は、現在模索中であり、来年度以降に実現化したい。（前項に記した通り）

3）農業体験等支援事業は、一部の農家に限定して実施するかたちとなったが、更に、体験指導を行っても良いと意欲的な農家も出ており、コロナで大勢の学生の導入が制限されたため、実現できなかったことが残念であり、引き続き来年度以降に実現したい。

実施した農家は、新規就農農家でトマト栽培、ほうれん草栽培において、模索が続いているうえ、人手不足が顕著であるが、投資の見通しなど不確実な点も多く、逆に学生の発想や意見が大いに参考となるなど支援の幅は広がっていた。（前項に記した通り）

4）建築実習及び支援（前項に記した通り）

2）成果（課題）が生まれた要因

以上の活動を通じて、地域に与えた影響または効果について

① これまで活動項目を列挙したが、これらの項目が、本事業対象地においての妥当性を判断した場合、全ての項目が当該地域からが望まれている項目を挙げており、何れも的確であると考える。

地域においては、近年、一般社団法人化した「馬瀬川自然公園‥」が 30 年に及ぶ地域活動を行ってきたが、まさにソフト面の活動にとどまっており、地域を挙げて活性化に取組んだ実績は見られない。

このような中で、本事業が、地域が要望する事案に正面から取組んで来たことは、地域の実態と既存の疲弊した現状を踏まえる必要性が高い内容であったこと。評価基準となるような指標は無いが、前述の通り、徐々にではあるが地域が変化していることを感じ取ることができる。付言すれば、弱小規模組織で、1 人分の給与に満たない予算規模にあって、地域を動かす顕著な働きや効果を期待することには限界があるが、それでもなお、挑戦し続けることとする。

② 事業対象地の妥当性は、本事業は、構成協議体が中津川市加子母及び下呂市馬瀬としており、両地とも、国道 257 号線沿線に所在し対象外である温泉街地を挟んで、農業・林業を基幹産業とする地域である。一般的には、行政単位で全てが動いている我国においては、行政単位をまたいだ活動事業地とする例は少ない。しかし、両地域は全て共通の課題を抱えており、これを単位としたことは、実例の少ない事例として貴重であり、モデルケースとして妥当性に富むものといえる。

3）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

学生や若者が刈払い機を使って作業をしている姿が各地で住民の目につき、また、草刈りを行った

箇所や面積が増えて、地域住民の目に止まり、地域では大きな話題となった。

空家対策では、コロナの影響かどうか明確ではないが、事業期間中に、これまで考えられないほどの活用の問い合わせあり不思議に思われるほどとなったが、活用の成果には繋がらなかったものが多かった。

4）気づきと今後に向けて

組織の使命として、草刈り支援が高齢化によって自身では対応できない住民が増加しており、お互いに住民同士の協力で支援が続けられるよう「地域コミュニティの充実」に務めることとし、さらに都市部からの学生や若者による支援策も継続できるように努力したい。

また、空家対策は、空家台帳を継続して維持整備し、その活用について行政等と連携しながら活かして行きたいと考えている。

●活動の妥当性等について

① 事業設計については、コロナの影響で多少の設計計画の変更を余儀なくされたが、大きく基本方針を変えることなく妥当である。

②実施状況は、コロナの影響で、多くの障害に直面することもあったが、常に協議を重ねて乗り越えてきており適切であったと自負している。

③ 知見の共有・活動の改善は、どの程度までのことを意識してこうした評価を行うものか経験が無いが、少ない知識と経験をもとに、不足する必要な能力は知人や有識者に相談して実施してきた。

④ 組織基盤の強化は、今後努力したい。（前述のとおり）

⑤ アウトカムの達成度は、コロナの影響で実施不可能となった項目はあるが、ほぼ初期の目的を達成した。

⑥ 波及効果は、根拠となるデータは無いが、少ない人口の高齢化社会において、全てが目を見張る内容となり、今後起こりうる効果は、都市と農村、若者と高齢者の交流の大切さ、必然性を実感し、これまで続けてきた私達の活動の意味を理解し、評価が高まるものと期待している。

⑦ 事業の効率性は、これ以上に効率性を評価するものが見つからない。

5 特筆すべき成果
～予測していなかった成果、副次的な効果、注目すべきエピソード等～

5-1　岐阜県は、学生によって農家・農業の支援活動を評価

① 本事業の草刈り支援のうち、岐阜県がスマート農業政策の一環でラジコンを購入し農業団体等に貸付け事業を行い、貸付けを対象となる団体は農業団体等でＮＰＯは除外されていた。私達の NPO 馬瀬川プロデュースが借用申請を行ったが、前年度までは NPO 団体であるため貸与対象とならず別名で借り受け活動を実施した。

多くの学生によって農業支援を行った実績が認められ、翌年度から NPO 団体であっても貸与が認められ、その活動は高く評価された。本事業が行った活動が高齢化が進む農家において、機械化による安全作業と効率化の手本として、また、若者と高齢者の交流の見本としての評価であり、鼻を高くしたいところである。

② 地域において自主的に公園づくり（資料：丸山公園写真）が開始され、出役者が次第に増加しており、自分たちの地域を自分たちで良くして行こうという機運が高まったと言える。

これには、私たちの活動が直接影響したとは言えないが、事業期間中（3 年間）に、私達の活動によって、都市部から若者が大勢来るようになり、各地でボランティア活動が開催される光景は、地域に取って変化を起こす起爆剤となっているのではと想像される。

6-1　チーム内の協働・連携

1）チーム内で協力した内容

C0：かしもむら、　C２：aichikara　C3：学生団体 加子母木匠塾

（1）調査事業

協力活動の項目	C0	C2	C3	協力した内容
広報	●	●	●	広報誌の作成段階から写真等の協力を得た。
内容的な連携	●	●	●	事業の推進者となる学生らを派遣のほか、事業の企画運営まで協議した。
作業面の手伝い	●	●	●	全ての作業をともに実施した。
その他	●	●	●	地元説明、ほとんどの会議に参加し合った。（ネット会議等含む）

協力による効果

協議体では、常に打ち合せを密にしてきており、また、多くの会員を抱える学生は、定期的な活動報告会が、ネット等を通じて開催され、日程調整、事業内容、準備作業等の打ち合せが徹底した。それでも意思疎通を欠くことがあり、徹底した打ち合せが行われたことが挙げられる。。

会議は夜間に行われ、学生たちがバイトを終えた後開催となり、参加が容易となるよう配慮されたことである。

（2）草刈りボランティア事業

協力活動の項目	C0	C2	C3	協力した内容
広報	●	●	●	チラシ作成、企画等
内容的な連携	●	●	●	刈払い機の共有、ラジコン機械の借り入れ手続きほか
作業面の手伝い	●	●	●	学生ら実行部隊の派遣、安全指導の支援等
その他	●	●	●	メンバー輸送、資材運搬等の協力

協力による効果

草刈り作業は、住民にとっては欠くことができない重要なものとなっている。したがって、現地では、住民全員がベテランであり指導者となるため、作業の進行や作業要領の指導は容易に伝達できた。

協議体メンバーは、日程調整、動員、行程管理、安全な運営等細部の調整が必要であり、協議体役員間で意思疎通の徹底と、現場管理に苦労したが、協力し合って無事に実施できた。しかし、全てがスマートとは行かず、長時間にわたる打ち合せ、現地での実行管理、長距離に及ぶ路程で夜間に及ぶことがあったことは課題である。

（3）地域活性化支援事業

協力活動の項目	C0	C2	C3	協力した内容
広報	●	●	●	地域内で取材に歩くことさえ広報の役割を果たした。
内容的な連携	●	●	●	各協議体の活動を地域住民に披露し、情報交換して事業に反映した。
作業面の手伝い	●	●	●	自治体、地域への要請、報告会に参加し合って、事例等を披露し活性化策を論じ合った。
その他	●	●	●	協議体のメンバー自身に対しても、お互いに資料提供し合って高めあった

協力による効果

地域活性化の課題と解決策には、特効薬はなく困難なテーマである。たまたま本協議体は事業実施前から活動をともにしてきており、これまで積み重ねてきた実績や経験を活かし、本事業に活かした。

更に、複数の大学（木匠塾に参加する大学、至学館大、名古屋大、岐阜大、国士館大等）の指導を仰ぎ必要なノウハウを学んで対応することもあった。

2）自団体の貢献と体制整備

(1) 自団体がチーム対して行った協力内容、その効果と評価

都市部から馬瀬に訪れた学生や若者は、学生団体木匠塾及び一般社団法人 aichikara に所属する学生又は、同団体が募集して参加を取り付けた若者が全てである。したがって、協議体が事業計画を立てる段階から打ち合せ会議等を行った上、実施に当たっては全ての事業について、日程、規模、内容、人員、資材の全てについて綿密な打ち合せを繰り返して実施してきた。

このように、本事業の全ての活動を協働で実施が可能となったのは、事業実施以前から中津川市加子母地内に於いて地域活動等を共にしてきた経験・実績があるため、今回の事業がより効果的な進捗を可能とした要因である。

（2）自団体の体制整備、知見やノウハウの蓄積についての変化・成果と評価

当団体は、少人数であるため常に事業実施は人的要員に苦慮してきた。全員が田舎に居住し限られた情報の中で余暇時間を利用して細々と活動しており、特別な知見もノウハウも備えていないため、当初は、何と面倒なことが要求される事業だと、途中で挫折する気になったことさえあった。今回の事業を経験し一定のルールや規程類を備えていたが、さらに整備することとなるなど多くの知識の習得となったことは有益であった。

6-2　支援対象者・参加者の参加促進、関係の形成

1）支援対象者・参加者の増加・広がりの実績、成果につながった工夫・協力等

前述の通り

2）支援対象者・参加者の変化、変化が生まれた要因・工夫

前述の通り、本事業の実施によって地域住民等の活動に対する理解が進んだが、支援対象者は 70 歳以上の高齢者が多く、支援した内容のほとんどが直接支援者の意見を採用しており、大きな喜びと満足となっている。これまで、他に地域活動団体等もないため、今回の我々の活動が目立っており、喫茶店等での話題となるなど、大げさに表現すれば一時期には大騒ぎとなった。

こうなった要因は、支援活動の内容が、住民の要望を取り上げたことである。都会に住む若者が刈払い機を操作する姿や、若い女子学生が各戸を訪問したことは、地域にすれば好ましい意味でのセンセーショナルなできごととなっているなど、かゆいところに手が届いたといえる。

今後の活動に対する理解や協力がどれほど期待できるか楽しみである。

しかし、支援者等の住居が集落地域内に散在しており、パソコンやスマホの使用頻度も少ないためネットによる連絡も不可能であり、情報伝達には新聞折り込みを利用する他は、各戸を訪問する以外に手段はない。今後の活動における手法や実施方法について、検討していく必要がある。

6-3　課題解決に取り組む協力関係の変化

1）協力関係構築の実績

本事業前の関係	
本事業を実施するに当たり、地元住民には、NPO 活動は思想団体の集団がやるものという先入観があり敬遠されてきた。 メンバーも、地元出身会員が少なく外国人をメンバーに加えて活動を行ってきており、理解が進まない一因となっていた。 そうした地元住民の反応がみられたことから、行政も対応を躊躇する傾向が見られ、理解が進まない要因となっていた。	●NPO は思想団体という会に対して偏見があった。 ●区長会での説明を拒否された。 ●区長会が会の情報誌等の配布を拒否した。 ●「好きな者が好きなことをやっている。」と暴言を浴びせられた。 ●住民の一部以外は、会の存在を知らなかった。（39%）

事業を通してできた関係	
事業通じ、行政、地域住民、子どもたちに、情報が伝わり、理解が進むようになった。 ●理解が進んだ団体等 ・振興事務所（行政） ・区長会（町内会） ・馬瀬川観光協会（下呂市馬瀬） ・商工会（下呂市馬瀬） ・下呂市森林組合 ・森林造成組合（中切） ・馬瀬建設(株)（下呂市馬瀬） ・馬瀬トマト組合 ・ふれあいファーム（売店・中切） ・中田商店（黒石） ・花卉生産者（中切） ・喫茶ミッキー（西村） ・喫茶たか（中切） ・喫茶橙（名丸） ・ホテル美輝（西村）	●事業開始前に行政（下呂市馬瀬振興事務所）に相談した。 ●区長会で計画内容を説明して理解を得た。 ●同席した市長からも激励された。 ●区長会で、年度ごとに実施した活動方向を行った。 ●区長会は、アンケートの配布・改修を引き受けた。 ●区長会は、地域向け情報誌の配布を引き受けた。 ●新聞折り込みで、地域に向けて情報誌を配布し周知した。 ●学生が、戸別訪問して聞き取り調査を実施し、交流が深まった。 ●学生が企業を訪問し、活動内容を報告し、企業からの説明を受けた。 ●学生が、地域内の食堂・売店を利用し、交流が深まった。 ●実施団体への偏見がなくなった。 ●

事業を通してできた関係			
前述の通り	1	行政	行政が行う地域団体へのサービス
	2	馬瀬川観光協会	イベント等への支援
	3	下呂市商工会	イベント･会議参加
	4	森林組合	事業活動（体験）支援
	5	森林造成組合	同上
	6	馬瀬建設(株)	会への支援
	7	商店等	会員の生活支援ほか

	8	トマト組合、花卉農家	事業活動（体験）支援
	1	地域行政･政策	馬瀬振興事務所
	2	会と連携･支援	観光協会、商工会、森林組合、森林造成組合、馬瀬建設(株)、トマト花卉農家
	3	会員へのサービス	商店３、ホテル美輝、

２）協力関係を構築する上で行った工夫、評価

事業開始となる前から、最初に下呂市馬瀬振興事務所に出向いてこれまでの会の活動内容や経緯を丁寧に説明し、行政側の理解を得るとともに支援を要請した。このことが本事業を行ううえで最も大切であったと考えている。行政であれば理解され支援を得られるのは当然であろうと考えていたことなどが原因して、理解が深まらなかったと考えている。

今回は、実施する事業ごとに、全て関係する部署への会の活動、事業内容の事前説明を十分に行って理解を得たことが効果的であった。

また、事業の実行部隊である学生や若者たちに対して、地域の自然について寸暇を惜しんで、村の歴史や文化、自然景観、植生景観、建築景観、道路景観などについて説明した。また、学生は、地域を見学したり、植物観察、魚釣り体験のほか、高山市内見学では地域の古い建造物や古民家を堪能した。宿泊時には、郷土料理による地元住民を含めて懇親会を設けて交流を深めた。

このような事業運営を、学生のメンバーが交代するごとに繰り返し行いながら、楽しい雰囲気の醸成に努めた。以上、今回実施した総和が、本会の事業が所期の目的を達成できたものと評価している。

7　結論、今後の展望、教訓

7-1　結論：中長期アウトカムに対する本事業の妥当性

馬瀬地区及び加子母地域での地域活性化の取組みが進み、都市部等から多くの若者たちが訪れて地域支援活動等を行い、自然豊かな地域の魅力が再認識され、地元に住み続けることの意義と自信を持つ人材が増加する。自然環境への関心が高まり、馬瀬に住みたいという人が増えている。			
事業実施プロセス	☆☆☆☆	**事業成果の達成度**	☆☆☆☆

★★★★★　想定した水準以上にある　　★★★★　想定した水準にある　　★★★　想定した水準にあるが、一部改善点が必要
★★　想定した水準に達するのに改善が必要　　★多くの改善の余地がある

●上記のように結論を出した理由

これまで、本事業において実施してきた地域が必要とする事案（人口減少及び高齢集落が求めている事案）の成果を踏まえ、新たに来年度以降の活動を継続したいと考えている。

とりわけ、地元地域（住民）が私達の組織や活動に好意的になり、これまでとは真逆の反応が見られることから、今後の活動が容易に実施できるものと期待し安心している。

地元住民の、私達の組織に対する認知度が、事業開始当時 39%（アンケート調査）と低かったが、事業実施によって 100%近くまで高まったことは、大きな自信となった。こうして一挙に認知度が高まった理由は、地域住民の全戸を対象に実施したアンケート（住み方アンケート）調査の実施以降に顕著となった。高齢であるためにアンケートの回答ができなかった家庭においても、本事業において学生らが活動する姿を直接見たり聞いたりして、頼もしく、元気づけとなるなど好評価を得たことは、地域内の大きな話題となっていることでも判断できる。

こうした住民の正しい理解と支援こそ、私達の組織の最も大切な励みであり、今後の原動力になると考えている。

7-2　今後の取り組み

本事業によって得たことを踏まえて、来年度以降の事業展開について思いを寄せているところであるが、現在のところ予算規模からみても、この 3 年間と同程度の規模で実施できるか不確実である。

今回の協議体を、さらに進化させて継続する計画を模索中であるが、本事業実施以前から継続してきた経験やノウハウは備えているものの、県等から提示される補助事業等は行政単位を跨いだ複数の事業地で実施することができるものは少ない。今のところ、十分には至っていなく検討中である。

地元地域の住民は、この 3 年に及んだ事業内容を継続して欲しいと期待しており、基本的には、地域と相談しながら綿密な意思疎通を図り、住民の意向に沿って活動を企画展開し、理解者、協力者への働きかけを行うよう考えている。

7-3　事業から得た知見、類似する課題に取り組む団体等に役立つ教訓

本事業は、基本的には疲弊する山村を支援する目的で、都市と農村、若者と高齢者の交流を柱として、「人口が減少しても住み続けられる力強いコミュニティづくり」を目指している。

もちろん移住受入れ策を続けており、日々移住を希望する人のニュースも僅かに飛び込んでは来るものの、日本中が人口減少しているなかで移住をあてにした対策で地域の人口が増加し、現状を維持・継続できる保証はない。

その状況が激しい当該地域において、それでもなお移住によって活性化を図ろうとする県又は自治体からの対策案等がいつも中心となっている。

私達の組織は、本事業による支援を受けて、人口減少が限りなく続き、そのうち 1000 人を割り込み、消滅集落に陥る日が目前となっている当該地域において、現時点の地域住民が要望する日常生活上の支援活動を行っている。これがたとえ優れた内容や多くを望む企画を立案して、明るい将来の夢を描いたところでおおよその結末は予測できる。そのように仕組まれる多くの補助事業には、概して正直なところ半信半疑である。私達のような小さな団体が、限られた小規模な予算の中で必死に汗を掻いて焦っても、厳しい現状を動かすには限界があることを本事業においても実感できた。

しかし、何もしないでは更に状況は悪化し、集落の消滅を早めるだけであることは確かである。本事業によって、住民の関心や意識が動き出したことは確実に実感でしており、やれば住民の意識や関心は変わることを、会員の中で実感し共有された。

さらに言及すれば、我国における現在の補助事業のあり方を、根本的に見直す必要性をひしひしと感じており、現場で必死に頑張っている事業体を維持し続けるためには最小限の人件費（事務局職員 1 名の経費）が確保補償できる支援策が求められるところである。

コロナ禍で苦しんでいるの国民を尻目に、先に実施されたオリンピックにおいては、想像もつかない巨額の経費が不適切な企業選択によって実行されるなどのニュースは、国民の耳を疑うばかりである。さらに、コロナ支援に関する補助事業においても、未だに次々と不適切な受給問題が発覚されており、これが我国の現実実態かと呆れる始末である。

以前から思うところであるが、こうした不正が絶えることのないのは、補助事業政策に原因があるのではないか。こうした補助事業政策のあり方を見直し、国が直営で実施するものを除いて、融資制度によって事業展開するような施策は考えられないものか。融資された金額は、事業が終了し目的が達成した後には必ず返還するようにする政策転換はないものかと考えるところである。

８．資料等

活動の写真

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　ラジコン実演会

ラジコン草刈機の実演会（２回目）を、学生・地域住民と実施

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　看板製作実習

馬瀬川の鮎をテーマに、観光用 PR 看板の企画・制作を行いました

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　建築実習キャンプ場支援

建築実習では、馬瀬川中流域のＳキャンプ場の販売施設拡張を実施しました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　建築実習　家具製作

公共施設水辺の館内に設置する家具の製作実習（未完成）を行いました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　建築実習（倉庫増設）

コロナ禍で少人数・短期間実習となり、その状況を全員にネット配信しました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　道具の使い方実習

若手大工さんから、道具の手入れ・使い方の指導を受けました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　小さな花火大会

夏の夜に小さな花火大会で盛り上がりました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　地域との交流会

地元の若手大工さんと食事をともにして交流を深めました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　草刈り支援　1

草刈りは始めての体験で、最初はおそるおそるでしたが、次第に調子が出てきました。暑かったよ。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　草刈り支援　2

機械操作は初めてで、安全指導を受けて、さあ実習。うまくできました。この夏、地域内で約 86 アールの雑草地を刈りました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　農業体験（農家支援）

農業体験で、S トマト農家を支援しました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　環境調査

細長く続く馬瀬の自然景観を散策・調査しました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　シイタケ生産体験

森林の副産物であるシイタケを、原木から茸の収穫まで体験しました。

2022 年度　学生らによる馬瀬での活動　地域の状況説明

スライドにより、人口減少や高齢化など馬瀬地域の状況を聞きました。

資料一覧表

資料１　住み方アンケート速報 Word
資料２　空家調査台帳
資料３　地域主催によるイベント資料
資料４　聞き取り調査野帳
資料５　休眠預金 2022 活動の写真
資料６　馬瀬川沿岸中切地区里山再生プロジェクト企画書
資料７　広報誌（地域版）
資料８　馬瀬を訪れた人へのアンケート（様式）
資料９　馬瀬での発見講座（パワーポイント）
資料 10 馬瀬年齢別人口（令和 2 年 4 月末）
資料 11 人工動態（平成 19～30）
資料 12 下呂市総人口
資料 13 住み方アンケート入力表
資料 14 円山公園写真資料１
資料 15 住み方アンケート速報（Word）